

ロアルド・ダール試論 —— 表現と浄化

奥 西 洋 子

ロアルド・ダール (Roald Dahl) の最初の作品は第二次世界大戦の戦争体験を記述した短篇 ‘A Piece of Cake’ で、アメリカの雑誌 *Saturday Evening Post* に発表されたノンフィクションである。ダール26才という若い時であった。この早いデビューは著者の言葉を信じるならば、全く偶然の幸運によるものであったという。‘A Piece of Cake’ は著名な作家、フォリスター (C.S. Forester) の依頼により、戦争体験の事実を述べるメモのつもりで、つい、夢中になって書き綴ってしまったものだったが、フォリスターは「才能ある作家の作品」と評価し、掲載の労をとってくれた。¹ 引き続き2年間、ダールは戦争にかかわる短篇を *Saturday Evening Post* や、非常に評価の高い文芸雑誌 *New Yorker* などに発表し、それらは後に *Over to You* として一冊にまとめられた。² そこには戦闘機パイロットが空中で遭遇する事件のほか、機銃掃射を受けた幼女の死、娘が爆死した老夫婦の絶望などが冷静に淡々と描かれ、それ故により強い衝撃を与える。物語の技術の巧みさと比較して、表現にはやや生硬さが無いわけではないが、そこにはオーエン (Wilfred Owen) の戦争詩に劣らぬ生々しい体験が語られている。そのためだろうか、*Over to You* に収められた殆どの短篇がノンフィクションであろうと感じさせる。しかし、再びダールによれば、*Over to You* の中でノンフィクションは、‘A Piece of Cake’ ただひとつ、全作品を概観してもノンフィクションはあと一作、‘The Mildenhall Treasure’ のみだという。³

ノンフィクションの材料を多数持っていた筈の彼がフィクションへ向かった理由をダールは次のように述べている。

Nonfiction, which means writing about things that have actually taken place, doesn't interest me. I enjoy least of all writing about my own experiences.... I could quite easily have described what it was like to be in a dog-fight with German fighters fifteen thousand feet above the Parthenon in Athens, or the thrill of chasing a Junkers 88 in and out the mountain peaks in Northern Greece, but I don't want to do it. *For me, the pleasure of writing comes with inventing stories.* (italics mine)⁴

創り出す喜びを強調している所がいかにもダールらしい。のちの彼の作品は発想の面白さが大きな魅力なのだから。そして、ノンフィクションと定義された‘A Piece of Cake’でさえも‘dramatic’⁵に潤色されているのである。

‘A Piece of Cake’は二部から成る。一部は墜落炎上した戦闘機から脱出する場面である。衝撃のため身体も頭も思うようにきかない様子が、むしろコミカルに語られている。

‘Down here there is a great hotness. What shall we do? (Signed) Left Leg and Right Leg.’ For a long time there was no reply.... Then slowly, word by word, the answer was tapped over the wires. ‘The-plane-is-burning. Get-out-repeat-get-out-get-out.’... Up went another telegram, ‘Can’t get out. Something holding us in.’... Something was holding me down and it was up to the brain to find out what it was. Was it giants’ hands pressing on my shoulders, or heavy stones or houses or steam rollers or filing cabinets or gravity or was it ropes?⁶

二部は、ガラリと変わって悪夢が続く。空一杯の敵機に追われ、一瞬、母の姿がよぎり、遂に高い崖から限りなくズルズルと落ちて行く。

処女作とは思われない巧みな構成である。撃墜されたとはどこにも書かれていないが、メッサーシュミットに追い廻される悪夢から察して、読者は当然撃墜されたと考えてしまう。事実はどうかといえば、戦闘機の操縦を辛うじてマスターしたダールは、リビアに派遣されたのだったが、間違った場所に着地するように指示され、燃料切れのため、砂漠に不時着、炎上し頭蓋骨骨折の上、鼻を失い、目も見えず、幾度も手術を受けることになるのである。⁷ コックピットから転がり出たのも、熱さから逃れるための殆ど無意識の行為にすぎない。機の炎上が友軍の注意を引き、たまたま助けられただけのことである。

ところで、処女作において、すでに書くことを楽しんでいるように見えるダールは、さだめし少年時代からその才能を発揮したことだろうと想像されるのだが、意外にも作文は、褒められていないどころか、酷評されてさえいるのである。次に作文の評価を引用しよう。

Easter Term, 1931 (aged 15). ‘A persistent muddler. Vocabulary negligible, sentences malconstructed. He reminds me of a camel.’

Summer Term, 1932 (aged 16). ‘This boy is an indolent and illiterate member of the class.’

Autumn Term, 1932 (aged 17). ‘Consistently idle. Ideas limited.’⁸

一体、作文の先生は何を見ていたのかと呆れるばかりであるが、これはダールが受けた学

校教育と関係があると思われる。

ロアルド・ダールを考える場合、原体験とでも言うべきものが少なくとも、ふたつある。ひとつは、むちで打たれる厳しい躰、今ひとつは戦争体験である。

ロアルド・ダールはノルウェー人の両親の下にウェールズで生まれた。父は成功した実業家であったが、ロアルドが僅か3才の時に病没した。溺愛していた娘の病死が引き金となり、肺炎にかかったのが原因だったが、それを記すダールの筆は実にそっけない。

The temperature soared and the pulse became rapid. The patient had to fight to survive. My father refused to fight. He was thinking, *I am quite sure*, of his beloved daughter, and *he was wanting to join her in heaven*. So he died. (italics mine)⁹

父親に対するいささかの恨みの気持ちがここに読み取れると私は思う。気の毒なのは母親である。夫と長女を3週間のうちに失い、先妻の子供ふたり、自分の子供3人をかかえ、更に8ヵ月の身重であった。5年前にノルウェーから移って来たばかりである。知人も殆どなかっただろう。子供たちを連れてノルウェーに帰ったとしても不思議ではないが、気丈な彼女はウェールズに留まり、亡夫の希望に従って子供の教育を行なったのだった。ダールが母を愛したのは当然であろう。彼の自叙伝、*Going Solo* には母にあてた17通の手紙が挿入され、母子間の愛情が戦争の空しさを浮かび上がらせている。彼は600通以上の手紙を母に書き送ったのだったが、母はそれをひとつ残らず大切に保存していたのだった。¹⁰

ダールは7才になると近在の学校に通学し始めた。優秀な学校で友人にも恵まれたが、悪戯っ子で、意地悪なお菓子屋さんのキャンデーびんの中にネズミの死体を押し込むという、悪戯をやったのけた。その幼い頃の興奮を思い出しながら彼はこう書いている。

When writing about oneself, one must strive to be truthful. Truth is more important than modesty. I must tell you, therefore, that it was I and I alone who had the idea for the great and daring Mouse Plot. We all have our moments of brilliance and glory, and this was mine.¹¹

彼の身上である「奇抜な発想」を思えば、梅檀は双葉より香ばし、と感心するのだが、勿論そのまま無事で済む筈はなかった。校長先生によるむち打ちである。その夜、皮下出血をみつけた母親は即刻抗議に出かけたのだが、「学校教育のやり方が分からないのだ」と言われ、それならイングランドの学校の方が良いだろうと転校をきめる。

こうして9才の少年はイングランドの寄宿学校へ送られた。しかし、ここでもむち打ちが待っていた。

ようやく13才になってダールは有名なパブリック・スクールに入学した。ここまで成長したからには、もはやむち打ちなど無いだろうと読者も期待するのだが、意外にもここがひどいのである。上級生までが厳しい。自叙伝には繰り返しつこくむち打ちについて書かれているが、ダールは自分の心理を次のように説明している。

By now I am sure you will be wondering why I lay so much emphasis upon school beatings in these pages. The answer is that I cannot help it. All through my school life I was appalled by the fact that masters and senior boys were allowed literally to wound other boys, and sometimes quite severely. I couldn't get over it. I never have got over it. It would, of course, be unfair to suggest that *all* masters were constantly beating the daylights out of *all* the boys in those days. They weren't. Only a few did so, but that was quite enough to leave a lasting impression of horror upon me. Even today, whenever I have to sit for any length of time on a hard bench or chair, I begin to feel my heart beating along the old lines that the cane made on my bottom some fifty-five years ago.¹²

ダールのような勇敢な人の心身にこれほどの傷を残したのだから、彼が恨むのも、無理からぬことと言えよう。¹³

校長先生は、後にイギリス国教会のトップの座まで昇りつめた聖職者であったが、ためらうことなく厳しいむち打ちを行なったという。牧師として神の慈悲を説き、他方でむち打ちを実行する、この矛盾はついにはダールの信仰心に影を投げかける所まで行ってしまうのだった。¹⁴

17才でパブリック・スクールを卒業したダールは大学進学をことわってシェル石油に就職し、念願かなって未知の国、アフリカに着任し、若者らしい冒険的な生活が始まった。やがて、第二次大戦の勃発と共にイギリス空軍に志願して‘A Piece of Cake’に描かれた墜落を経験し6ヵ月の治療の後、ギリシャに着任した。彼は飛行機の操縦はなんとか出来たが、戦闘についての知識は皆無であった。それを聞いて驚愕した同室のデイヴィッド・クック (David Coke) が、できるだけ忠告をあたえてくれた。クックはレスター伯 (The Earl of Leicester) の嫡子で、戦争さえなければ、いずれは伯爵位とノーフォークの海辺にある、あの有名な美しい館、ホルカム・ホール (Holkham Hall) と膨大な美術品や書籍を受け継ぐ筈であった。¹⁵ 彼は人柄が良く、ふたりはすぐに親友となった。英空軍の圧倒的な劣勢の中で戦ううち、ダールは頭蓋骨骨折の後遺症のため飛行が不可能となり、帰国せざるをえなくなった。

ダールたちナイロビで飛行訓練を受けた20人のパイロットのうち、17人が死んだという。また、ダールが参加したギリシャ戦線で、15人のパイロットのうち、4月17日に2人死亡。翌18日、1人行方不明、20日に4人死亡。アツという間にパイロットが激減し、その後、補充されたものの、たちまち5人になってしまった。¹⁶

二十代前半でこのような戦闘を体験した若者は、その後どう生きて行けばよいのだろうか。幸いにもダールは書くという仕事に恵まれた。*Over to You* に収められた短篇のうち、特に心ひかれる作品が二つある。‘They Shall Not Grow Old’ と ‘Katina’ である。前者はパイロットの不思議な体験である。彼は飛行中にふと別の世界に入ってしまう、そこでは戦死したパイロット達が敵も味方もなく、互いに手を振り、笑いながら飛行し、光り輝く緑の草原に次々と着陸していた。彼も続いて着陸しようとするが、何か大きな力によって元の世界に押し戻されてしまう。そして数日後に撃墜され、‘I’m a lucky bastard.’ と、一言いい残して落ちて行く。

空軍の場合、狙うのはマシンであって、パイロットではないという。だから敵機を銃撃し、パイロットが脱出するのを見るとホッとするとダールは言う。パイロットの死は「煙を吐きながら落ちて行った」か「帰って来なかった」か、どちらかである。同僚の死は大きな不在感であると同時に奇妙に現実感の欠ける一面もあるのではなからうか。青い空、緑の草原、透明な日光が降り注ぐ中で、国家も民族もなく笑い合っている若者達。ケルトの常若の国、ティール・ナ・ヌォグ (Tir na n-Og) を想わせる草原である。残された者達は年老いるけれども、「彼らは歳を取らない」のだから。そういう場所が、どこかにあるかも知れない。あつてほしいと思う。

‘Katina’ は円熟した短篇で作者の自信が全篇に溢れている。メイン・プロットは空爆で孤児となった少女が英空軍のパイロットにかわいがられ、元気を取り戻して行くが、飛行場を爆撃された際に、全身怒りに震えて飛行場の真ん中に飛び出し、撃たれて死ぬ。少女と暮らした数日間にもパイロットは次々と死んで行き、彼らのエピソードが織り込まれている。そこには自伝に記された、いくつかの出来事も潤色され、変更されながら表されている。

最も重要なエピソードは親友ピーターが死んだ夜のことである。

Suddenly I heard a movement. The flap of the tent opened and it shut again. But there were no footsteps. Then I heard him sit down on his bed. It was a noise that I had heard every night for weeks past and always it had been the same. It was just a thump and a creaking of the wooden legs of the camp bed....

‘Hello, Peter. That was tough luck you had today.’ But there was no

answer....

In the morning I looked at the bed and saw it had been slept in. But I did not show it to anyone. I put the blanket back in place myself and patted the pillow. ¹⁷

作者は感傷もコメントもなく、このエピソードを終わっている。この事件は、ふたつの自伝にも、‘Lucky Break’にも触れられていない。体験かどうか気になる所である。作品はフィクションと呼ばれているが、その中のエピソードは事実に基づくものも多い。このエピソードは、次のような書き出しで始まっている。

You need not believe me; I do not expect you to, but I am telling you what happened. ¹⁸

だからといって事実であるとも断定できないが、私は神秘的体験談と考えたい。死者が還って来るといった思想は日本人には容易に受け入れられる。実際的なアングロ・サクソン人には難しいだろうが、ダールは神秘主義が残る北欧の出身である。その上、毎日のように同僚が死んで行く異常な状況で、人智を超えた経験があったとしても不思議ではない。むしろ、あってほしい位である。

神秘的要素として、今ひとつ、ギリシャの山脈がある。山は敵意をもって人間に害をなそうとし、山頂では神々（人間に厳しい異教神である）が人間を嘲笑しているように思われる。山と神々の存在は、死んだピーターの帰還を受け入れる準備作業であろう。このように初期の短篇中、最も佳い二作が超自然的要素を含んでいることは注目に値する。

‘Katina’では文体も微妙に変化する。ヘミングウェイに似た、てきぱきと乾いた文体を中心に、山を描く重い長文、ユーモラスな会話、ピーター・エピソードの静かな文章、切迫した戦闘の表現、流麗な結末の文体。文章だけを考えてもダールは円熟していた。

ところで、ダールにとって、書くという作業はどういう意味を持っただろうか。‘A Piece of Cake’の執筆を振り返って、「生まれて初めて自分のしていることに完全に没頭した」¹⁹と述べる彼は、創作活動とは次のようなものだという。

It is then that he [a writer of fiction] slips into another world altogether, a world where his imagination takes over and he finds himself actually *living* in the places he is writing about at that moment. I myself, if you want to know, fall into a kind of trance and everything around me disappears. I see only the point of my pencil moving over the paper, and quite often two hours go by as though they were a couple of seconds. ²⁰

画家にとって画くという仕事は楽しいものであるという。一方、浴びるようにコーヒーを飲みながら書いたといわれるバルザックのように作家は苦しみながら書くと聞く。それを‘trance’と呼ぶダールは、やはり稀有の天性の作家であろう。そして彼の場合、もうひとつの意義があったと思う。意識したにせよ、しなかったにせよ、*Over to You* は同僚への鎮魂である。書くことによって戦争体験を乗り越えられたのだと思う。

短篇作家としてのダールを私は評価したい。短篇の名手が多いアイルランドの作家達に劣らないと思う。しかし現在、世界中で熱狂的に読まれているのは彼の児童文学である。ダールは短篇を書き始めたその年に児童文学、*The Gremlins* を雑誌に発表した。²¹ その後、*Charlie and the Chocolate Factory* その他数多くの児童文学の名作を手がけ、児童文学中心に創作活動を続けた。彼が創作活動の早い時期に児童文学と出会ったことは幸運であり、救いであったと思う。彼は超自然的要素が自分の心を解放する場であることに気付いた筈である。そこで、想像力が最高に生かされる児童文学というジャンルを喜んで選んだのだと私は思う。

ダールの児童文学の魅力は、奇想天外な発想、ストーリー・テリングのうまさ、言葉の面白さ、そしてユーモアである。彼自身もユーモアを重視し、作品の主人公に次のように主張させている。

“I think Mr C.S. Lewis is a very good writer. But he has one failing. There are no funny bits in his books.” ...

“There aren’t many funny bits in Mr Tolkien either.” ...

“Children are not so serious as grown-ups and they love to laugh.”²²

確かに、ルイスは生真面目な人である。トールキーンにはユーモアはあるが、それは上品で洗練された知的なものである。ダールが必要だと言っているのは哄笑なのである。ディケンズのような、おおらかな笑いである。彼は自分の原体験からして、子供はしっかり笑わせなければいけないと考えたのであろう。

彼の主張した通り、ダールの作品は笑いに満ちた作品が多い。だが、その笑いは、底抜けに明るいおおらかな笑いから、笑いながら少レゾットする陰のある笑いまで、様々の笑いがある。内気な中年男性の恋を描く *Esio Trot* の心暖まる微笑。*The Giraffe and the Pelly and Me* の陽気な笑い。*Ah, Sweet Mystery of Life* の皮肉な笑い。²³ 児童文学に限れば、いずれもよく笑える作品である。しかし、児童文学の中でさえ、不安な笑いがある。その意味で特に気になる作品が、*Matilda*, *George’s Marvellous Medicine*, *The Witches*

であろう。

Matilda は不思議な物語である。主人公のマティルダはディケンズの『大いなる遺産』(*Great Expectations*)などを読みこなす能力を持ち、電子計算機に劣らない頭脳を備えた天才的な少女であるが、不思議なことに両親は彼女を嫌って、早く成人して厄介払いしたいと待ち望んでいる。父親はインチキな仕事で金儲けをし、母親はゲームにうつつを抜かして家庭をかえりみない。父親はマティルダを常に「無知だ」「愚かだ」と責め立て、とりわけ読書を楽しんでいる時の彼女を毛嫌いし、図書館から借りた本をズタズタに破り捨てることさえする。賢いマティルダは、それが父親の「嫉妬」であることを見抜いたのだが、子供のこととて仕返しをしなければ納まらない。

The only sensible thing to do when you are attacked is, as Napoleon once said, to counter-attack. ²⁴

誰しも不当に評価されるのは辛いことである。まして肉親からそうされる苦々しさは容易に察することができよう。とはいえ、相手は親であり、何か納得できないものがある。その点を作者はこう説明している。

You must remember that she was still hardly five years old and it is not easy for somebody as small as that to score points against an all-powerful grown-up. ²⁵

圧倒的な大人の力と無力な子供。幼時の体験から出た口惜しさが、まだ消え去らずにあるのだろうか。ともあれ、幼いマティルダは全く無邪気に振舞いながら奇想天外な方法により手厳しい仕返しを続ける。それらは確かに大いに笑える事件ではある。途方もない両親ではあるが、あまりに愚かで、いくつかの弱点もあり、ある意味で彼らは人間的であると言えるかも知れない。

一方、校長先生のトランチブルは、これはもう「怪物」である。彼女は理由もなくマティルダを嫌い、諸悪の根源と見做し、叩いてやりたいとさえ思う。

“I wish to heavens I was still allowed to use the birch and belt as I did in the good old days! I’d have roasted Matilda’s bottom for her as she couldn’t sit down for a month!” ²⁶

ここで birch とあるのは、束ねた小枝で首などを叩くことで、Charlotte Brontë の *Jane Eyre*、第6章でジェインの親友ヘレンが叩かれたのがこれである。今は勿論そのような躰の時代ではない。代わりにトランチブルは女の子のお下げ髪をつかんで円盤投げのように

投げ飛ばしたり、男の子の耳をつまんで持ち上げるなどの蛮行に及んだため、遂にマティルダは〈念力〉を使ってチョークを動かし、黒板にトランチブルの旧悪を書き立てて彼女を責め、追い払うことに成功する。強力なトランチブルがマティルダの策略にあっけなく破れるのは不思議だが、現実的な人間は超自然力に対抗できないということだろう。この策略は、トランチブルの良心を責めるということのほかに、故事に由来する恐怖も持ち込んでいると思われる。バビロン王、バルシャザールが大酒宴にうつつを抜かしていた時、壁に手が現れてバルシャザールの破滅を予告する文字を書いたといわれる。ロンドンのナショナル・ギャラリーには、この場面を描いたレンブラントの油彩があり、バルシャザールと取り巻きの人々の恐怖に怯える表情が実に見事に表現されている。ダールはレンブラントを思いながらトランチブルの恐怖を描いたのではないかと思う。

エクセントリックなトランチブルは、ダール自身が悩まされたかつての恐怖の対象を再現すると共に笑いの材料ともなり、それを笑い飛ばすことによって作者はいささか溜飲を下げたとと思われる。しかし、あまりに人間離れているために、笑いという意味では、マティルダの両親、ワームウッド夫妻に及ばない。トランチブルはあまりに怪物である。これほど極端にエクセントリックな人間像にしない方が面白かったのではないか。全編中、最も面白い章は、マティルダの担任のハニー先生が、彼女に英才教育をしたいと両親に相談に行く‘The Parents’の章である。両親は愚かで身勝手であるが、人間らしい面もあり、最も笑える章である。

物語の結末で、悪事が露見した両親は逃走し、マティルダはハニー先生に引き取られて二人共、満足そうである。子供に関心のない両親、振り返りもしないで去って行く両親である。他方、先生とマティルダの間には理解と愛情が深まりつつあり、その方がマティルダにとって幸福であることは明らかだが、それでもなお、後味のすっきりしない結末である。この作品は1988年、晩年の作品である。作者はまだ不幸な幼児体験から抜け出せないのだろうか。

George's Marvellous Medicine は意地悪な祖母からいじめられ、脅かされた少年が不思議な薬を作って飲ませると、おばあさんが縮んで消滅してしまうという話である。発想も表現も実に可笑しいのだが、どこかひっかかる所がある。*The Twits* と同じように完全なノンセンス文学と考えるべき作品かも知れない。²⁷

The Witches は、二つの賞を受けた1983年の作である。初めから終わりまでダールの身上である奇想天外な発想で貫かれたユーモア一杯の作品である。この世から子供たちを消滅させようと企む魔女達が、子供をネズミに変身させる薬を開発したが、計画を漏れ聞いた少年の働きによって、逆に魔女達がネズミに変えられてしまう。このアウトラインを見れば目出たい話であるが、不気味な要素も含まれている。まず、「本当の魔女は普通の服を着て、ごく普通の女性に見える」という魔女の紹介である。見分けられないということは

不安であり、様々な想像をかき立てる。作者は続けて、

She [a witch] might even be your lovely school-teacher who is reading these words to you at this very moment.²⁸

と脅かすことさえする。

やがて少年は魔女達に捕らえられ、ネズミに変えられてしまうのだが、当人は次のように考えて、一向に悲観する気配はない。

Little boys have to go to school. Mice don't... When mice grow up, they don't ever have to go to war and fight against other mice.²⁹

もうひとりの少年ブルーノもネズミに変身したと悟るや、

“No more school!”... “No more homework! I shall live in the kitchen cupboard and feast on raisins and honey!”³⁰

と、おおいに嬉しかったのである。

作品の後半は、主人公はネズミとして大活躍し、ネズミであることの利点を最大限に活かしているので、読者はネズミの心理を理解したような錯覚を覚えるほどである。そして愉快に話が進んで行く。しかし、少年はネズミのまま人生を送る筈である。しかも、ネズミの寿命は短いのだ。老齢の祖母と一緒に死ねると少年は嬉々としているのだが、読者はここで、やはり割り切れない気持ちになる。

このように、*George's Marvellous Medicine* は家庭内の事件であるが、その他の二作には学校嫌いが強く表されている。晩年の作品にそれが現れるということは、書くことによって、それも自己解放が行なわれ易い筈の児童文学を書くことによってさえ、苦い経験が浄化されなかったということになるのだろうか。その疑問を持ちながら最後の作品、ダールの死後出版された *My Year* を読んでみたい。

My Year は1993年に出版されたエッセイである。ダールの大部分の作品に素晴らしいイラストレーションを付け、彼の本の楽しさを増した当代きってのイラストレーター、クエンティン・ブレイク (Quentin Blake) が、ここでは一変して美しい水彩画を添え、なつかしい幼時の思い出と豊かな英国の田園風景を抒情的に描き出している。

都市を嫌い、田園で暮らしたダールが74年間見守った自然への愛が、風景、樹木、小鳥、

蝶、昆虫、小動物などを対象に惜しみなく溢れ出ている。それと共に、幼い頃の悪戯や命がけの崖登りなど多数の思い出が語られている。彼の口調は穏やかで静かな、なつかしい、満ち足りた幸福な現状肯定の語りである。彼が最晩年にこのような穏やかな心境に達したことは読者にとっても救いである。残念ながら、ここにも体罰への言及はある。しかし、すぐに彼は、もはや体罰の時代ではないことを思う。ようやく恨みは消えたと考えてよいだろう。更に彼は学校の教育方法を次のように是認している。

Every word that was spelled wrongly in an essay had to be written out correctly one hundred times after work. I don't know any better way than that of drumming the stuff into you.³¹

ダールが、その一部であれ学校教育を褒めたのは、これが初めてではなからうか。ここからも察せられるように、ダールは全てを受け入れ、許し、いとおしむ心境に達したと思われる。ここまで来るには、いくつかの児童文学と二つの自叙伝によって少しずつ過去の苦々しさを洗い流す過程が必要であった。

My Year には哄笑はないが、自然と人生と人間への愛に触れ、絶えず微笑を誘われる作品である。心が洗われるような清々しさを与えるエッセイをダールが最後に残してくれたことを彼のためにも喜びたいと思う。

注

- 1 Roald Dahl, 'Lucky Break' in *The Wonderful Story of Henry Sugar and Six More*, (Penguin Books, 1982) pp.211-6.
- 2 Roald Dahl, *Over to You* (Penguin Books, 1973)
- 3 'Lucky Break', p.220.
- 4 *Ibid.*, pp.219-20.
- 5 Roald Dahl, *Going Solo*, (Penguin Books, 1987) p.97.
- 6 Roald Dahl, 'A Piece of Cake' in *The Wonderful Story of Henry Sugar and Six More*, p.227.
- 7 *Going Solo*, p.97ff.
- 8 'Lucky Break', p.203.
- 9 Roald Dahl, *Boy*, (Puffin Books, 1984) p.20.
- 10 *Ibid.*, p.82.
- 11 *Ibid.*, p.35.
- 12 *Ibid.*, pp.144-5.

- 13 とはいえ、ダールだけが特にひどくされたわけではなく、20世紀の半ば近くまで、イギリスの騷は厳しかったのである。
- 14 *Boy*, p.146.
- 15 参照 田中亮三『英国貴族の館』 講談社 1992.
片木篤『イギリスのカントリーハウス』 丸善株式会社 1991.
マーク・ジルアード『英国のカントリー・ハウス』 住まいの図書館 1989.
なお、Philip Clucas, *Britain, An Ariel Close-up*, (Crescent Books, 1984) の表紙のカヴァーに使われているのが、他ならぬホルカム・ホールの写真であり、代表的なマナー・ハウスであることが分かる。
- 16 'Lucky Break', p.208.
Going Solo, p.123.
- 17 'Katina' in *Over to You*, pp.97-8.
- 18 *Ibid.*, p.97.
- 19 'Lucky Break', p.215.
- 20 *Ibid.*, p.213.
- 21 *Ibid.*, p.216.
- 22 Roald Dahl, *Matilda*, (Puffin Books, 1989) pp.80-1.
- 23 Roald Dahl, *Esio Trot*, (Puffin Books, 1991),
The Giraffe and the Pelly and Me, (Puffin Books, 1993),
Ah, Sweet Mystery of Life, (Penguin Books, 1989).
- 24 *Matilda*, p.41.
- 25 *Ibid.*, p.29.
- 26 *Ibid.*, p.89.
- 27 Roald Dahl, *George's Marvellous Medicine* (Puffin Books, 1981),
The Twits (Puffin Books, 1982).
- 28 Roald Dahl, *The Witches*, (Puffin Books, 1985) p.10.
- 29 *Ibid.*, p.119.
- 30 *Ibid.*, pp.180-2.
- 31 Roald Dahl, *My Year*, (Jonathan Cape, 1993) p.56.